四連協ニュース

第10号

'68.7.12

文学部四年生
連絡協議会
事務局

斗いの意義を再確認し、就職事務再開をかちとろう！

筑波移転阻止

文学部自治会は6月26日より既に半月にわたってストライキ斗争を斗っている。これは去る6月20日体育学部で行なわれた秘密裡の評議会において一決定とされた、教育大の筑波移転に関する調査費計上に対して、その撤回を要求するための斗いとして行なわれているのである。

教育大の筑波移転に関しては、MP委の中間答申を見るならば、研究機能と教育機能の分離、そして中教審路線の実質化などの点が指摘されるだろう。それは日本の産業界からの強い要望である大学の目的別再編成への現れであり、それ自体科学の発展にとって無縁、否阻害物であることは既に多く語られている。そして、それらの点を踏まえて文学部自治会は筑波移転阻止の斗いへと立ちあがっているのである。

ストライキの意義

昨五6月10日に行なわれた土地確保決定は、筑波移転実質化へのサー歩としてなされた。そして、これの撤回斗争として斗われた昨五の25日にわたる文学のストも、また理、教育、農学部のストも、大きな成果を得られぬままに夏休みを迎える中で解消していってしまった。ただその後夏休み中に行なわれた調査費計上は、決定が遅れたことなどもあって実現されなかった。

そうした経過のうちに今回の調査費計上「決定」がなされたのである。この調査費計上の意味するものは、昨五行なわれた土地確保の上に具体的な移転計画を明らかにするものであり、それは何よりも筑波移転実質化へと更に大きく地固めを行なうものである。そして現時点とは、筑波移転に反対する我々にとって絶対に譲ることのできない一線であり、移転に向けての急流を防ぎ止め得る最後の地点なのである。それだけにこそ、我々は果敢なる意志統一のもとにストライキをもってこれに突入したのである。

こうして、今五のストが昨五のストと違った形態をもってたたかわれているのは、我々の強い意志の表示としてであり、きたるべき昨五のストの総括の上になされたものである。我々が決定されてしまったことに対する抗議としてではなく、期確にその撤回を迫っていこうとする時、ストが単なる心理的な圧迫による効果のみを期待するのでは決定的に不十分である。我々の具体的なたかによって一正常な大学運営を停止させ、大学当局をして譲歩せしめねばならないのは明らかであろう。ここに、巨額封鎖更には体制封鎖を行なわねばならない訳が存在するのである。

ここにおいて、民主的教授等との連帯を叫ぶ人がいる。勿論我々は決して教授会を敵とすることを目的としている訳ではない。むしろ文学部教授会が全体移転反対の立場から様々な活動を行なってきたことは、それ自身大きな限界を有するものではあるが、我々としてもその立場を理解して認めるところである。だがこの間の情勢の推移は、教授会による対応＝既成秩序内における対応では全く不十分なのである。それは文学部教授会としてなし得る最大限の行動、移転審議のボイコットをした中においてこそ、移転実質化への策動が次々となされたことによっても余りに明らかである。今、移転への流れを阻止し得るものは、既成の秩序を越えた新しい斗う主体のみなのである。そして、その主しい主体として我々が立ち上らないならば、移転への既成事実の積み重ねは更に進むであろう。また、想起せねばならないのは、昨五文学部教授会が6・21声明を発し、移転審議ボイコットを決定したのは、学生らの強い突き上げの中だったということである。ストライキという既成秩序の枠をはみ出した斗いを行なう時、表向きでの教授会との共斗などあり得べくもない、我々が斗いの中における教授会と人連帯を言うのであるならば、立場をお互いに理解した上で各々のでき得る斗いを追求することの暗黙の了解くらいでしかないだろう。

我々の斗いが強固な意志に支えられ、ラディカルなものであればある程に、大学当局からの弾圧も強まってくる事は当然な手段をもって行なわれている。だが我々は、今回のストライキ斗争の意義を再確認し、要求貫徹まで絶対にバリケードを死守せねばならない。

四年生をめぐる問題

今回のストライキが固く団結及び本館をとざして斗われるという中にあって、就職事務の停止という問題が生起してきた。就職という問題は我々四年生にとって絶対的に必要なものであり、ひつきょう正当な権利であると考える。だが現在大学側は就職事務を行なっておらず、そして我々が再三就職事務再開を要求したにも拘らず、その答はいつも全面的な拒否でしかなかった。その理由として言われたのは、「精神的・技術的に不可能である」ということであった。精神的に不可能ということ位、全くの言いのがれにしか過ぎないことは今更指摘するまでもないだろう。また技術的に不可能であるということの内容について、補導課長は電話・郵便が利用できないひらだと言っているが、電話を切ってしまったのも、郵便入配達を停止させているのも、みな学校側のやったことである。更に、事務は補導課内部だけで全部できるのではなく、他の部局にまたがるものもあると言うが、補導課内部だけで処理できる問題については、やる用意があるのかという点に対して答えないところから、これもきわめて恣意的なものでしかないことが判るだろう。

大学側の策動を粉砕せよ！

それでは大学側は何故に就職事務の再開を拒否するのかと、それは何よりも学生のスト体制切り崩しのためである。先に述べた如く再開拒否の理由はないにも拘らず、そして本館封鎖の翌日補導課長がいかなる条件でもいいから就職事務だけはやらせて欲しいと言ったにも拘らず、却ってその後大学側から事務再開を拒否しているのは、絶対的に就職ではならない四年生に対して、就職事務再開拒否というおどしをかけて四年生をスト反対にまわらせ、スト全体を切り崩そうとしていることにほかならない。ここで確認しておこう、就職事務が行なわれないのはストをやっているからではなく、学校側がストを口実に事務を拒否しているからなのである。我我は大学側のこの卑劣な策動を断乎として粉砕していかねばならない。

大学側は、ストをやっているのだから自分の要望＝就職も放棄するのは当り前という論理を根拠的に掲っている。そこにおける就職斡旋の把え方は大学側が便宜をはかってやるのだという観点である。それに対し我々は、就職は我々の権利であり、どれを斡旋するのは大学側の義務であるという視点に明確に立つべきである。そして、スト・ライキが我々の権利を一切放棄して抵抗するという消極的なものでは決してなく、攻撃的な全てのものをもって打破していくものである以上、権利は権利として保持し、それをもって突き進まねばならない。ここにおいて我々の主張と大学の々論理」は真向から対決せざるを得ず、そこには力の論理としての斗いが存在する。それ故我々の主張を貫徹させるためには、絶対的に優勢な力が必要となる。我々がこの間一貫して訴え続けてきた四連協への結集は、四年生の圧倒的団結と固き意志統一により、大学側からの攻撃をかし我々の前進をかちとらんとしてであった。

我々は如何に斗うか

就職事務に関する我々の要求が拒否されたままに就職関係の締切はいくつかは過ぎてしまった。そして今、各県単位の教員試験も次々と続いている。特に教職関係への希望者が多い文学部という事情もあるので、我々は中心的には文学部事務室における就職事務へ各種証明書発行等＝再開を目指し本日、対文学部長団交を設定した。これにより絶対に我々の要求を実現させ、それをもって補導課の就職事務再開への一段階としたい。

就職問題について述べてきた。だが四年生の斗いは決してそれだけにとどまるのではない。あくまでも筑波移転阻止の斗いが中心的課題なのであり、その斗いを進める中で大学側によってひけられてきた弾圧が就職問題なのである。それ故、我々の斗いは就職問題を全体的斗争との関連で把え、どこに結集したカをもって全体的斗争を斗い抜いていくことが何より必要なのである。

昨日の教育学部長代行との団交の席上において、教育学部からも対評議会団交を斡旋する旨が確約され、対評議会団交の実現へ一歩近づいた。我々四年生も就職問題にのみ捉われず、筑波移転阻止の斗いに積極的に参加していくことが要請されている。

文学部の四年生諸君、そして全学の四年生諸君、我々の四年間の大学生活の一つの集約点として、この筑波移転阻止斗争を最後まで斗い抜いていこうではないか。四連協は全学の四年生諸君が強固なる意志結集の下、最後まで斗い抜かれんことを強く強く呼びかける。